

出来た！！オムツから自立(トイレ)排泄へ

－自立排泄支援の取り組み事例－

社会福祉法人光彩会

特別養護老人ホームみちみち大宮

フロアーリーダー 花田 春香

動 機

私はフロアーリーダーとして介護職員の教育や指導、フロアの入居者様の状況の把握や職員調整など、日々介護現場で奮闘中です。私は、施設内における『排泄委員会』の委員長であり、日頃から自問自答していたことがありました。『入居者様の排泄・・・オムツから自立できるような支援ができないだろうか』と。介護職歴約10年、ずっとモヤモヤとしていました。“在宅ではトイレに行き、自立排泄をしていたのに” “介護施設だから安易にオムツ使用になっていないだろうか” “自力で立ち上がれないからオムツ使用でよいのだろうか” “尿や便が漏れてしまうからオムツなのか”とあれやこれやと疑問が出てきたのです。入居者様の意思でなく、これは職員側の都合ではないだろうか、とも悩むようになりました。私が当事者だったらどう思い、どう感じるだろうと、オムツでの排泄を想像してみました。即座に「いやだ。トイレで排泄したい」と思ったのです。入居者様もきっと『できればトイレ内で排泄をしたい』と思うのではと、早速、施設長に相談し、排泄について改善取り組みをすることにしました。

目 的 『トイレ内での排泄を心掛ける』ために排泄ケアを改善する

方 法 対象者を決定⇒現状把握⇒排泄の課題⇒どのようにすれば改善できるか⇒実行⇒検証⇒改善⇒実行⇒検証

①対象者の決定

- ・対象者:年齢 90 歳 女性 要介護度 5
- ・ご入居時の状況

当施設入居日 令和3年5月28日 介護付き有料老人ホームよりご入居。

令和3年8月26日 施設内の居室の移動があり、自分が担当するユニットへ。

(排泄)

入居時サマリーの内容のまま、オムツ対応。1日6回の排泄介助で対応していた。

意思疎通が難しくトイレなどの訴えもできない状態。

(食事)

車椅子に座ったまま介助にて召し上がっていただく。

食形態:ペースト粥/ペースト食

(歩行・移乗)

移乗・移動:全介助

②現状把握

日時:令和3年9月6日

オムツとパッド使用 ベッド上でオムツ交換実施。状況を確認

一日平均6枚パッドを使用

状況:・オムツ着用により臀部赤くたれており、掻き壊しが見られる。

- ・またパッド内で尿が収まる尿量であることがわかる。
- ・オムツまで達する事が無い。

③取り組み内容

1) 日時・令和3年9月8日

参加者: 介護主任、ケアマネジャー、看護師、機能訓練士、同じユニットの職員1名

協議内容: 上記現状を、ユニット職員で分析し課題と対応策を協議した。

(1) オムツとパッドの着用では蒸れが多く発生しているのではないかと仮説した。

↓

ユニ・チャームさんからのアドバイスもあり、蒸れが緩和されるリハビリパンツとパッドの組み合わせで経過観察することにした。

2) 令和3年9月25日

リハビリパンツとパッドへの組み合わせへと取り組み開始

令和3年9月26日～10月25日経過観察し、見えてきた課題は以下の通りです。

見えてきた課題

- ① 柔らかい便が1～2日に1度みられており、排便が出きらず1日中柔らかい便が継続することがある。
- ② 排便量が多い場合にはパッド内に収まりきらず漏れてしまうことがある。漏れてしまった場合にはご本人が便を触ってしまうことや、衣類まで汚れてしまい都度交換する必要が出てきた。
- ③ 便が続くと臀部が赤くただれてしまうことが有り、軟膏を塗ることや、排便が見られるたびに陰臀部洗浄を行うことや時には臨時で入浴を行う必要性が出てきた。
- ④ 居室内対応時間の増加や記録作業や衣類洗濯時間の増加が感じられた。居室内対応時間が多くかかる事でリビング内の見守りが出来ず、他のご入居者の見守りが出来ないことにより転倒などの事故リスクが高いと感じた。
- ⑤ 排便が見られていた前の時間に体を前後に揺らしていることが多いことに気が付く。
- ⑥ 柔らかい便が続いていた為、食事形態を見直す必要はないかと考えるようになる。

以上の課題に対応するにはどうしたらよいか多職種で話し合い、「トイレで排便できるようにならないか」という方向性にまとめ、それに向け取り組むことになりました。

「改善取り組み A」1日1回トイレ介助を実施する。

- なぜ1日1回トイレに座ることができると判断したのか、その根拠は以下の通りです。

↓

ベッドに端座位になり15秒ほど、支えがなくても座位を保つことができ、車椅子から椅子に移乗し食事を提供してみた際、座位崩れなく座っていることができていたことを確認できたので、トイレにも座れるのではないかと確信しました。

また、排便が見られる前には体を前後に動かしている様子が見られていたので、トイレ誘導を行うタイミングが分かりやすいという点もトイレ誘導へ進める大きな要因となりました。

いずれも職員が日頃の状態観察を詳細にしていることや情報の共有により、その方にあったケアを見つけ出せることを職員とともに実感できました。

「改善取り組み B」トイレ介助と食事形態の変更を実施する。

改善取り組み AとBを令和3年11月6日から実施

【トイレ介助】

- ・トイレ介助は2名対応で実施。
- ・リハビリパンツ内やオムツ内に排便がみられた際には、1日中排便が継続していたが、トイレ内に排便がみられると、その後はパッド内に排便がみられることがなくなり1日1回の排便になった。
- ・臀部の赤みも無くなり、臀部状態も改善された。



①職員一人での介助の様子



②職員二人での介助の様子



③ご本人トイレへ座った時の様子

【食事形態の変更】

- ・食事形態をペースト食から刻み食へ変更したためか、柔らかい便から形のある便へ、便の性状が変化した。



ペースト食から
刻み食へ変更



【取り組みの記録】

排泄介助をオムツ使用からリハビリパンツとパッドの組み合わせへ移行し、1日1回からトイレへの誘導を始める。

	0:00	1:00	2:00	3:00	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	
変更前	緑					緑				緑				緑			緑					緑			
臥床時間	→													→								→			
離床時間							→				→						→								

変更前は、昼夜ともに統一したパッドで排泄介助を実施し、1日に6回排泄介助を行っていた。

日中離床時間は1回の離床につき、長くても2時間半。それ以外はベッド上で過ごされていることが多かった。

日中臥床時間が多かったためか、夜間帯、目を開けていることが多くみられており熟睡できていなかった。

日中の傾眠が多く、声かけにも返答などがみられることが少なかった。

	0:00	1:00	2:00	3:00	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	
変更後						緑								トイレ 緑									紫		
臥床時間	→																							→	
離床時間							→																		

パッド内排尿量の測定を実施し、皮膚状態と尿量の状態に合わせ、夜用（ユニチャーム スキンコンディション）パッドへ変更。

夜間帯のオムツ交換のために介入する回数が就寝時と起床前の2回となったため眠っていることが増えた。

夜間帯、よく眠れているためか、日中、声かけに返答がたくさんみられるようになったり、笑顔がみられるようになった。

その結果・・・

トイレ内で排尿・排便ができた！

まとめ

上記の結果、排便がパッド内に出なくなり、また便を触ることもなくなったので、臀部状態が改善されました。トイレでの排便ができるようになり、排便時の陰部洗浄回数、臨時入浴や衣類交換の回数も減少しました。

排尿については、パッド内排尿量が少なくなり、今までは1日6回のパッドの使用数でしたが、1日3回の使用になり、コスト面でも削減につながりました。

考察

トイレ内に排便が見られることで臀部状態の改善がされ、また、実際にトイレ介助を実施してみて、リビングに近い場所での排泄介助の為、転倒リスクのあるご入居者様の見守りがしやすくなり、心的ストレスが減った・オムツ交換を行うよりも介護量が減り改善して良かったとの意見も聞かれ、トイレ内排泄を推奨する第一歩となりました。

ご入居者の負担や介護者の負担の削減にもなり、何よりも、ご入居者の排泄がトイレ内で出ると「スッキリして良かったね」と自然と言葉で出るようになり、「トイレで排泄する事は良い事」という認識に繋がったことは嬉しい事だと感じました。

ご本人は、今まで車いすに座ってリビングで過ごしていましたが、しっかりと座位が保てるようになり、今では椅子に座って過ごせるようになりました。

これまで自分で抱えていた課題がユニット内の職員の協力や、多職種での課題解決への方法を見出すことにより解決できたことは今後の介護人生において大きな習得となりました。今後もご入居者本位の介護ができるよう努めていきたいと思えます。